

# 生きる人見つめる



## 坪田譲治文学賞受賞の佐川さん

受賞作は、父の逮捕が原因でエリート校を中退した中学生が主人公。失意の中、母の姉である「おばさん」が切り盛りする児童養護施設に身を寄せ、少しずつ成長の階段を上る。けなげな青春小説だ。

「悪人」「悪賢」「悪の教典」と、「悪」を冠した作品が幅をきかせる昨今の小説界。だが、坪田譲治文学賞Ⅱの今年の受賞作は「おれのおばさん」（集英社）。至ってのどかなタイトルの作品に託した思いを、著者の佐川光晴さんに聞いた。

(柏崎敬)

# 経験、物語に投影



受賞作「おれのおばさん」

「世の中が悪だとか大人は汚いとか、そういうふうには書きたくなかった」と佐川さんは言う。「子どもの幼い残虐さ、児童養護施設に身を寄せ、少しずつ成長の階段を上る。けなげな青春小説だ。けれど、自分がそういう話を書きたいとは全く思わない」

登場人物たちが人生と向き合う姿を、ひたすら温かい視線で追った。「自分の関心のあることを地道に追いかけただけ」というが、話題性や刺激が先行するような作品への違和感が、言葉の端々ににじむ。「そういうものには、いつかまひが来る。いま本が売れていないのは、それをやりすぎた面もあるんじゃないか」

「描きたかった」

選考委員の一人で文芸評論家



話している。

# 岡山学芸館高が受賞

読書や文化活動に貢献した学校に贈られる「第3回田辺聖子文学館ジュニア文学賞・学校賞(文学)活字文化推進機

には全国で4校が選出され、中国地方では唯一の受賞。

## 田辺聖子文学館ジュニア文学賞

「悪人」「悪賢」「悪の教典」と、「悪」を冠した作品が幅をきかせる昨今の小説界。だが、坪田譲治文学賞Ⅱの今年の受賞作は「おれのおばさん」（集英社）。至ってのどかなタイトルの作品に託した思いを、著者の佐川光晴さんに聞いた。

岡山学芸館高は国語の授業に、短歌や俳句、川柳づくりを取り入れている。朝日新聞岡山版で毎週水曜日に掲載している歌壇や俳壇で、毎週のように生徒の作品が入選している。毎朝10分の「朝読の時間」を設けて読書に親しみ、全校で同じ本を読む取り組み

も、年に数回実施している。個人賞の部門でも、短歌や川柳、読書体験記部門に6人が入賞した。指導する斎藤恵子先生は、土井晩翠にちなんだ「晩翠賞」を受賞した詩人でもある。「学校全体での取り組みを評価してもらえたことがうれしい。生徒たちの表現す

君の推しし地蔵尊の表情たたくく腹が立つたら見よつこの顔  
雪かきの人らに早く届けんと保存食を運ぶ赤山への道  
(井原金森 築)  
(真庭家原 緑)

る力をさらに伸ばしていきたい」と話している。(柏崎敬)

真庭市の赤山地域に古くから伝わるガマ細工のトートバッグに

ツグをつくる「ONてくぐりプロジェクト」お披露目会が28日山高原であった。ガマ細工は600年あるとされ、手提げかご、雪駄の民具が作られて丈夫なのが特徴。山地域で自生す

キバナカイウ え・西本真理子

